

町民参加の町史づくり



# 竹富町歴史だより

2015・3・31

第36号



竹富町教育委員会

沖縄県石垣市美崎町11番地1  
TEL (0980) 82-6191

## 目次

『竹富町史』第六巻「鳩間島」を発刊	1
第三二回竹富町史編集委員会開催	2
書評『竹富町史 第五巻 新城島』	5
二〇一四年度 沖縄県地域史協議会	2
〈記念碑を訪ねて〉 10 仲里朝貞頌徳碑	4
通事孝作	6
狩俣恵一	7
竹富島と東京・沖縄・石垣の郷友会	1
古見村結願祭	1
第十回白浜芸能祭	1
沖縄県立図書館譲渡会について	1
平成二六年度受贈図書一覧	1
竹富町史の刊行物	1
平成二六年度業務日誌	1
編集後記	1

### ●表紙の写真●

ユーニンガイ  
千立村 世願 (千立御嶽、2014年4月23日)

田植えが終わり、植付けた稻が根付いて伸び始めたころ行われる豊作祈願。千立村では節祭、豊年祭とあわせて三大行事に位置づけられている。2014年のユーニンガイは、午後から金座山のムトゥウガン（通称ウイヌウガン）で祈願し、続いて公民館に隣接するフタデウガン（千立御嶽）で祈願があり、その後祝賀会が行われた。祝賀会では稻がしっかり根付くことに配慮して、大きな音を立ててはならないことになっているため、スピーチ後の拍手も控えられた。また、ユーニンガイはフサバニガイ（稻草葉願い）とも呼ばれている。

# 『竹富町史』第六卷

## 「鳩間島」を発刊

### —島建てから現在までを網羅—

『竹富町史』島じま編の第六巻「鳩間島」を平成二六年度事業として発刊しました。

川満栄長町長は「本書を編集刊行するに当たって御協力いただいた多くの町民、関係者の皆様、また多大なる御尽力をいただいた町史編集委員、専門部会委員、執筆者の方々に対しまして衷心より厚く感謝を申し上げます」と挨拶し完成を喜びました。

有人島九つ、無人島七つの島じまを抱える「多島一町」の竹富町は、それぞれの島の個性を際立たせるため、町史編集事業では「島じま編」を企画しています。「鳩間島」編は「竹富島」「小浜島」「新城島」に続く四番目の刊行に当たります。本巻の発刊に向けて平成十六年九月、鳩間島コミュニティーセンターで鳩間島編専門部会が発足しました。以後十二回にわたる専門部会会議を開き、島の古老や郷友会などの協力を得ながら根気強く編集作業に当たりました。

本書の内容は、序章を「神の島 夢の通り路 鳩間島」と題し、「島の概況」「自然」「歴史と伝承」「教育」「人と暮らし」「祭祀と歌謡」「人生儀礼」「民間伝承」「生業・産業」「交通・交易・通信」「保健・衛生」「鳩間島の方言」「娯楽・競技」「人物」「歴史年表」と終章「鳩間島の美しい未来に向けて」で締めくくる十五章に加え、コラム

十六編を盛り込み構成されています。執筆者は島出身者を中心にして島にゆかりのある関係者十五人が担当しました。

特に注目されるのは、今回はじめて方言分野を第十二章「鳩間島の方言」として章立てしたことや、第五章「暮らしのなかの道具」第六章「豊年祭の儀式信仰図」第八章「子どもの遊び」でイラストや図を入れて読みやすく編集していることなどです。また、表紙には鳩間島の英雄、儀佐真主が創建したと伝わる友利御嶽を、裏表紙には航路から見た鳩間島の写真を用いることによりサブタイトルである「神の島 夢の通り路 鳩間島」を表現しています。

町史編集委員長の石垣久雄氏は発刊に寄せて、「鳩間島に思いを寄せる多くの方々が本書を手にとられることを期待します」と報告しました。

「鳩間島」編はB五版で、巻頭カラー写真八頁、本文七一〇頁、頒価三、二四〇円（税込み）。石垣市内、沖縄本島内の書店で絶賛発売中です。



## 鳩間島

## 第三二回竹富町史編集委員会開催

第三二回竹富町史編集委員会が二〇一五年三月十五日（金）石垣港離島ターミナル会議室にて次の日程で開催された。

### ① 竹富町史編集委員委嘱状交付式

#### 1) 竹富町史編集委員委嘱状交付式

2) 竹富町教育長あいさつ・・・慶田盛安三

#### ② 竹富町史編集委員会

1) 編集委員長・副委員長の選出

2) 竹富町史編集委員長挨拶・・・石垣久雄

3) 経過報告・・・・・・・事務局

#### 4) 協議

出席者は委員十五名（欠席者二名）事務局より三名。

町史編集委員会に先立つて編集委員の任期満了に伴う委嘱状交付式が執り行われた。任期は平成二九年一月三一日までの二年間となつてている。

委嘱された委員は次の十七名。

◎石垣 久雄 （石垣市文化協会会長）

○里井 洋一 （琉球大学教授）

新本 光孝 （琉球大学名誉教授）

石垣 金星  
（西表をほりおこす会会长）

上江洲儀正  
（南山舎株式会社代表取締役社長）

大城 肇

☆大浜 修

黒島 精耕

玉城 功一

☆通事 孝作

西里 喜行

玻座真 武

鳩間 真英

花井 正光

本田 昭正

三木 健

吉川 安一

（公立大学法人名桜大学名誉教授）

（◎は委員長、○は副委員長、☆は新委員）

引き続き慶田盛安三教育長から「竹富町史編集事業が完遂できるよう委員の先生方には今後ともご指導よろしくお願ひします」とあいさつがあつた。

編集委員会に先立ち、役員の選出が執り行われ、編集委員長には石垣久雄氏が留任され、副委員長に里井洋一氏が互選された。

第三二回竹富町史編集委員会開催にあたり、長年にわたり町史編集委員としてご尽力され昨年九月に亡くなられた阿佐伊孫

良氏へ黙祷が捧げられた。

その後、事務局から二〇一四年度の業務経過報告があり引き続き次の議題にそつて審議がなされた。

今回の議題は、「鳩間島」発刊の報告、島じま編の進捗状況、その他となつていて。

#### 議題 一、 「鳩間島」発刊の報告

鳩間島編専門部会委員長の吉川安一から「鳩間島」を刊行するにあたつて関係各位、執筆者や情報提供者などへの感謝の言葉があり、残りの島じま編へ向けた取り組みの姿勢や、発刊後の社会教育や学校教育への有効な活用方法など、今後の課題が話し合われた。

#### 議題 二、 島じま編進捗状況の報告

波照間 執筆者の体調不良や仕事の都合などにより全体的に滞つており、来年度の発刊は厳しいものと思われる。雑なものではできないので、次々年度の発刊にできないか委員会での検討をお願いしたい。（玉城功一 波照間島編専門部会委員長）

（前近代編）

黒島 黒島の執筆者二人が体調不良で原稿の提出が滞つている。三月二七日に原稿の締め切り日なので、その状況をみたうえで四月中旬に専門部会を開き、構成表と執筆者の分担を確認したい。（玻座真武 黒島編専門部会委員長）

#### その他

竹富町に存在する宮良用庸家文書などをすべて掲載し、その文書がそこに存在した意味を考えるようにしたい。詳細は小委員会で議論をして決定していくみたい。（里井洋一 前近代編小委員会長）

（自然編）

自然編は写真を多用して視的に訴える概説的なものと、資料的なものの二冊の刊行を予定している。西表島を中心に各島の優れた自然を紹介できるような資料にしていくと考えている。

（新本光孝 自然編小委員会長）

来年度の早い時期に専門部会を開催し、編集作業を進めたい。

（石垣金星 西表島編専門部会委員長）

西表 西表島編は島も大きく、集落も多いので「歴史民俗編」「近現代編」というように二冊の発刊を予定している。具体的なことは今後の専門部会で話し合い報告したい。専門部会の委員の大半が沖縄本島在住のため全員が集まる機会は少ないが、

## 書評『竹富町史 第五卷 新城島』

### —哀惜と賛嘆がつまる一書—

波照間 永 吉（沖縄県立芸術大学附属研究所教授）

表紙タイトルに打たれた緑色の感嘆符「！」。しかし、これは目の錯覚で、感嘆符に見えたのはパナリ・新城島と呼ばれる上地と下地の島であつた。両島の間、およそ八〇〇メートル。仲良く並ぶ双子のような島である。本書は、パナリ焼き、ジユゴン漁、そして、秘祭「アカマタ・クロマタ」で知られる、この二つの島に生きた人々の、苦難に満ちた足跡を永遠にとどめる記録である。

隆起サンゴ礁の小島の過酷な自然・風土と、容赦のない「琉球王国」と近代日本の政治・社会的圧力。これを人々はどのように凌ぎ、村の歴史を重ね、特異な文化を築いてきたか。地元新聞の社説が、「キビの单収がわずか五トンと經濟価値のない文明から切り離された小島」（一九六五年四月二九日。二三三ページ）と書いた二つの島。そこに生きる人々は、やがて、祖先が海を渡つて切り開いてきた、対岸の西表島仲間川の河口部に移つて行つた。それは六二年、下地島が最後の住人の離島により廃村となり、上地島の小学校が七五年、七九年間の歴史に幕を下ろして閉校となる形で進行した。一七三七年に七〇五人、明治後期から昭和戦前期まで三〇〇～五五〇余人の人々が暮らした

た村が、「日本復帰」後の一九七六年には九人になつていた。水も電気もない、自然のなすがままの生活に見切りをつけてのことであつた。その要因は政治の貧困にも求められるのであるが、島の人々の苦悩は如何ばかりであつただろう。伊波普猷の「孤島苦」というものの原質はこういうものであつたに違いない。

本書は全十六章の「町史」とは言いながら、私には、新城の人々の希望を求めての「出パナリ」の物語であり、島の人々の、父祖の地とその文化に向ける永遠の哀惜と賛嘆のつまつた一書と受け止められた。第四章「パナリ焼とザン」や「アカマタ・クロマタ」祭祀の概要が示された第七章「信仰と祭祀」、第十二章「伝統文化」をはじめ各章は、島の人々のその思いを告げて、本書を紐解く人々を感嘆させることだろう。

（『沖縄タイムス』二〇一四年四月十二日付掲載）

## 二〇一四年度 地域史協議会 —報告—

沖縄県地域史協議会の二〇一四年度第一回研修会が六月六日（金）午前十時から南城市玉城中央公民館で開催されました。午前中に南城市（旧玉城村）字富里、當山集落を巡見し、午後の講演会へと移りました。講演のテーマは「南城市的歴史と文化について—沖縄南部の歴史・文化からみた南城市」、講師は井上秀雄氏（沖縄県立芸術大学名誉教授）で、開闢神話から自然、芸能、文化、観光に至るまで幅広い内容の講座でした。井上氏は最後に「時間の関係で南部地域の歴史・文化を総体的に紹介できませんでしたが、皆さんは伝えたくなる地域のよさを発掘して組織的に討論、学習会を通してまとめていただくことを希望しております」と締めくくりました。

休憩の後、報告I「竹富町史第五巻『新城島』の発刊報告」（竹富町史・飯田泰彦）では、竹富町史の取組みや今後の発刊計画、新城島編の書評などの報告を行いました。続いて報告II「移民関係資料について」（読谷村史・辻央）、報告III「北中城村字島袋のノロ文書について—『北中城村史第七巻文献資料編別冊』の発刊を目指して」（北中城村史・城間義勝）の発表があり、二〇一四年度第一回目の研修会を終えました。

第二回目となる研修会は十月三〇日から十一月一日にかけての三日間、石垣市に於いて開催されました。初日の日程は石垣市立図書館にて石垣繁氏（八重山文化協会会長）の「八重山の年中行事」の基調講演。続いて報告Iに大城敦子氏（那覇市歴史博物館）の「デジタルミュージアムの取組」、報告IIに山本英康氏（名護市史）の

「名護大百科事典（WEB版）の取組」と題しての報告がありました。

二日目は「現場で歴史を考える」をテーマに古地図と歴史史料を基に伊原間集落一帯の村落跡や井戸などを巡見し、午前の日程を終えました。午後の部は場所を伊原間公民館に移し、報告III「石垣島北部の歴史を考える—史料が語る伊原間村の歴史—」と題して—石垣市史編集課課長の松村順一氏の発表があり、報告IVは鎌田誠史氏（有明工業高等専門学校・建築学科准教授）による「村抱護を有する近世村落の空間構成と村立ての原理—石垣の村々を中心にして—」、報告Vに山本貴繼氏（中部大学・人文学科准教授）の「地籍図・土地台帳に記録された沖縄の村落—その構造と変化をめぐって」の発表をもつて二日目の日程を終えました。

三日目は「平久保半島東海岸—安良村跡とその周辺」と題して一九一二年（明治四五）に廃村となつた安良村跡の巡見を行い、濱崎家屋敷跡や石垣市指定文化財の「安良村跡の御嶽」、国指定天然記念物「平久保安良のハスノハギリ群落」なども観察することができました。好天にも恵まれ三日間にわたる石垣島研修会の全日程を盛会裡に終えることができました。



（この写真は、伊原間集落の古地図と歴史史料を基に伊原間集落一帯の村落跡や井戸などを巡見する様子を撮影したものです。）

## 仲里朝貞頌徳碑

西表島の祖納集落に建つ新装の記念碑である。建立場所は現在、祖納公民館の前庭だが、一九七五年（昭和五〇）に設置した時は旧祖納公民館内に建てられていた。それが二〇〇〇年（平成一二）に祖納公民館の敷地内に移しも新たに建て替えられた。

仲里氏は那覇市首里生まれの医師。一九〇九年（明治四二）、県立病院附属医教習所卒。その後、熊本県で中村医院に勤務。一四年（大正三）、首里で医院開業。二〇年（同九）には八重山炭鉱汽船会社の病院長として西表島に赴任。以後、県防疫医・竹富村医・校医そのほか多くの嘱託医としてへき地医療に精励した。特に二七年（昭和二）、マラリア防遏所出張所長として勤務以降は、その日の日常業務のほか、防蚊のため村周辺の草木伐採、水溜り、湿地帯の埋め立て、排水溝の改修、簡易水道の建設など環境衛生の改善に努め、終戦後もマラリア防遏に貢献した。

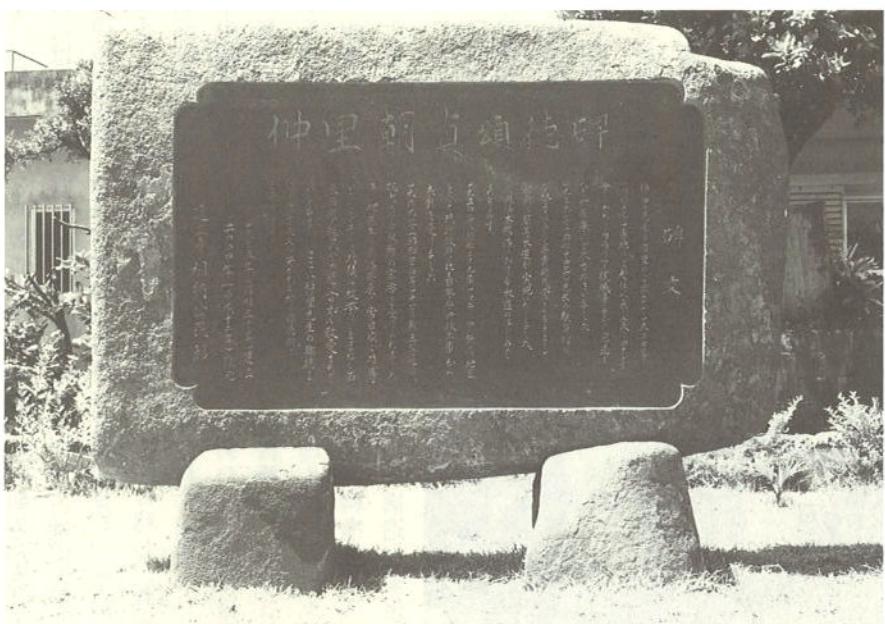
新しい石碑はタテ約一・八メートル、ヨコ二・四メートルの大きさの中国産の岩石。二つの足の台座に乗っている。そこには黒御影石がはめ込まれ、大書された「仲里朝貞頌徳碑」が横書きで書かれている。

碑文には、「仲里先生は首里のご出身で一九二七年（昭和二）当地にご赴任以来、實に四十年余にわたりマラリア撲滅事業の完遂とへき地医療にご尽力されました。〈中略〉先生は部落発展に常に頃ご指導いただきその功績は枚挙にいとまがなく西表西部住民

から慈父の如く敬愛されております。ここに仲里先生の御徳を偲びみ靈よ永久に安かれと祈り頌徳碑を建立いたします」とある。

一九六九年（昭和四四）には勲五等旭双光章を受章した。

（通事孝作）



# 竹富島と東京・沖縄・石垣の郷友会

(沖縄国際大学教授)

狩 保 恵 一

## 一 東京竹富郷友会

東京の竹富郷友会は、一九二五年（大正一四年）十月に、京橋区（現在の中央区）木挽町のそば屋「長寿庵」で設立総会を開き、「嘉利勇士会（かりゆしかい）」として発足したが、一九二九年（昭和四年）、「竹富郷友クラブ」と改称した。また同年、与那国真智により機関誌『曙光』を刊行した。そして、一九六八年（昭和四三年）、「東京竹富郷友会」と改称して現在に至っている。

三郷友会の中でも、東京竹富郷友会はもつとも歴史が古く、先進的な活動を行つてきたが、その東京竹富郷友会の設立の経緯と活動について、与那国真智翁は「郷友会六十周年の回顧」<sup>\*1</sup>の中で、次のように述べている。

竹富島の諸先輩は大正十年頃からポツポツと上京し始めていた。震災（大正一二年の関東大震災）前から在京している方々を列記してみると左記のようである。

新里（崎山）用枝、棚原宇謝、迎里文雄、新里（崎山）毅、上間清亭、友利繁雄、前三盛（三島）保夫、山盛哲、与那国（浅海）弘重、東里（浅海）百合子、三盛尚徳、棚原真志、高嶺繁夫、大浦（前三盛）カイシ、迎里祐夫、前新金助、前三盛喜一らの十余名でしたが、大正十二年（一九二三年）の震災に遭つて帰郷した方は、与那国（浅海）弘重、東里（浅海）百合子、大浦（前三盛）

カイシ、迎里祐夫らで、翌十三年には与那国静（南條彰子）、大浦英美、請盛博、新里（山盛）マイチ、与那国（前三盛）秀、与那国（浅海）弘重（再上京）、東里（浅海）百合子（再上京）、金城栄吉らが上京している。

先駆者達は殆どが大志をいだいて東京へきたものの不況とあっては中々就職口がない。後続者も震災後の焼け野原とあつては思うように就職することもできない。自力で職を探さなければならない。独学で警察官になつたり（山盛哲、上間清亭）、通信局に採用された方（棚原真志、迎里祐夫、請盛博、金城栄吉）は非常に幸運であった。女性達は、紡績工場で働くのが大半で与那国静（南條彰子）先生が東洋モスリン合資会社で礼儀作法や生花の師匠として女工達を指導しておられた関係もあつた。

一番収入がよく歓迎されていたのが自力発動車（人力車）を駆使するのが最も有望な職であつた。体力に自信のある方は好んでこの職に甘んじていた。その職場が京橋区（中央区）にある木挽町の田中屋であつた。この田中屋には、新里（崎山）用枝、棚原宇謝、迎里文雄、前三盛喜一、前新金助、三盛尚徳、高嶺繁夫らの諸氏が勤務し、新富芸者や新橋芸者の華やかな美人を相手に活躍していた。

しかし、先輩達はいかに憧れの東京で活躍しているとはいえ生り島のことが忘れられるものではない。幼少から青少年になるまで親兄弟、親戚、友人、村人全体が一体となつて生活してきた環境と島の特殊性（情味溢れる人情感、祭事、特に種子取祭の雰囲気、人なつっこい言葉、紺碧の海、透き通つた夜空、数々の民謡、無数の芸能、温暖な気候、強烈な台風等々）の望郷の念が常に脳裡から離れない。一度は必ずと云つてよいほど襲つてくるのが本

ーム・シックである。

現在は郷里と東京が短時間で結ばれ、朝出かけて夕食は郷里で楽しめる時代だ。ホーム・シックにはなりようがない。このホーム・シックが強い人ほど望郷の念が強くまた遠く離れるほどふる里に心が惹かれる度合いが強いと云つてよい。その引力がいつかは炎となり燃えさかつてお互いが結びつき心の拠りどころを求めてくる。この結晶が「かりゆし会」となつて現れたのである。

一九二五年（大正一四）十月に京橋区（現在の中央区）木挽町そば屋の長寿庵（現在は昭和通りに営業中）で創立総会を開き「かりゆし会」が発足したのである。出席者は、新里（崎山）用枝、棚原宇謝、迎里文雄、内盛唯夫、高嶺繁夫、与那国静（南條彰子）、迎里祐夫らの諸氏で当日は雨天のため出席者が少なかつたようである。小生はある事件に巻き込まれて到々出席できず誠に残念でした。

以後は新年を迎える毎に会長宅でお年始を兼ね総会をしたのである。

引用が長くなつたが、一九七〇年（昭和四五）に上京した私は、与那国真智翁の温厚篤実なお人柄に接し、郷友会でお会いできることを樂しみにしていたが、先の文章はそのお人柄がそのまま表れているように思える。

一九二一年（大正一〇）当時の東京と竹富島の距離は、今では想像を絶するような遠い距離であり、その縮まらない距離が望郷の念を強くし、「かりゆし会」設立の要因になつたと述べており、郷友会の主な活動としては、「会員の相互扶助」と「仕事上の会員同士情報交換」であつたことが分かる。

言い換えるならば、共同体精神を持つた竹富島の先輩たちは、

大都会の東京でも、竹富島の共同体を築こうとしていたのである。そして、それは「結い」的なプライベートな相互扶助の共同体であり、竹富島を経済的精神的に支援する意図は希薄だつたようと思えるが、震災後の大正という時代を考えるならば、自分たちの生活で精いっぱいであり、それは当然のことと考える。

以上のように、東京竹富郷友会発足当時の主な活動は、会員相互通が活発になる。

そのほか、竹富島から要請のあつた募金活動には郷友会が中心となつて支援してきた。東京竹富郷友会の親島への主な支援活動について募金を中心に表したのが次の表である。

（表）東京竹富郷友会の竹富島への主な支援活動

一九四〇年（昭和一五）	サイレンを竹富島に贈る
一九五八年（同三三）	西塘御嶽改築奉納金紅白幕を贈る
一九六三年（同三八）	竹富小学校創立七〇周年記念事業募金
一九六四年（同三九）	喜宝院へ菊輪灯贈る
一九七三年（同四八）	竹富小学校創立八〇周年記念事業募金
一九七七年（同五二）	竹富小中学校体育館内部施設充実募金

機関誌の発行については、『曙光』などがあり、戦争でしばらく途絶えることもあつたが、一九七一年（昭和四六）には棚原真宜氏により『たけとみ』が創刊され、現在に至つてゐる。また、創立四十周年、五十周年、六十周年、七十周年、八十周年には、

それぞれ記念誌『竹富』を発行してきた。

東京竹富郷友会活動で注目されることは、竹富島の芸能および伝統文化への関心度の高さである。その活動は戦後のラジオ番組の出演や柳田國男や本田安次との交流などから始まり、さらには一九七六年（同五一）の東京三宅坂における種子取祭芸能の国立劇場公演を契機として飛躍的に芸能への関心が高まつた。

NHKのラジオには、内盛唯夫夫妻が一九五一年（同二六）、一九五二年（同二七）、一九五七年（同三二）に出演し、ラジオ東京には一九五四年（同二九）に出演して、竹富島の民謡を紹介した。一九六三年（同三八）にNHKテレビで「馬乗者」を紹介したのも、竹富郷友会員の男子たちであった。

また、一九六三年、内盛唯夫夫妻は、柳田國男が主宰する日本民俗学会の会誌に、竹富島の種子取祭について報告した。そのつながりであろうか、柳田國男が竹富郷友クラブの総会に出席したこともあるたといふ。

しかし、何と言つても東京竹富郷友会に大きなインパクトを与えたのは、一九七六年（同五一）の種子取祭芸能の国立劇場公演であった。その年には、東京竹富民俗芸能研究会が発足し、劇場公演、テレビ出演など、さまざまな芸能活動を展開した。また、種子取祭奉納団がスタートしたのもその年であつた。奉納団は東京竹富郷友会と竹富島の大きな架け橋となつてゐる。

## 二 沖縄竹富郷友会

昭和二十年代に発足した石垣竹富郷友会と沖縄竹富郷友会の状況はどうだつたのか。まず、沖縄竹富郷友会の記念誌や山城（与那国）善三先生の手記から考える。

山城善三著『我が回想録』には、「那覇に来たら、前本君、花城永文君達が尋ねて來た。現在八〇名近く首里那覇に竹富出身者がいるから郷友会を組織したらどうかとの事で大賛成、クリスマス前夜祭に発会式を举行することにして新聞広告をした。場所は蚕糸試験場で集まつた連中四五名、郷友会の名称を偉人西塘にあやかるという意味で、西塘会と命名した」（西塘会発足、昭和二十五年十二月二十四日）と記している。

また、沖縄竹富郷友会創立五十周年記念誌『竹富』の一九五〇年（昭和二十五年）の項目では、次のように述べてゐる。

十二月一五日 花城英文宅に山城（与那国）善三・萬田茂起・前本英資・白保英行氏等集まり、郷友会発足の打ち合わせをする。  
 十二月二十四日 琉球農林省技術員養成所学生寮（那覇市松川）で西塘会発足。参加者四五人。所帯数四六世帯、会員数一五七人。西塘大主にあやかつて、「西塘会」と命名する。会則・規約未制定。会長山城善三、副会長真栄里文雄、会計前我名勤を選出する\*2。

善三先生の手記には、「前本君、花城永文君達が尋ねて來た」とあるが、それは十二月一五日よりも前の出来事だつたのである。また、発会式の「場所は蚕糸試験場」とあるが、これも郷友会記念誌の「琉球農林省技術員養成所学生寮（那覇市松川）」といふ記録と異なつてゐる。

いずれにしろ、沖縄の竹富郷友会は、西塘大主にあやかつて、「西塘会」と命名されたことは間違ひのないことである。その命名から考へるならば、進取の気性が前面に出た命名であり、東京のように望郷の念から郷友会が組織されたのとは異なるようと思ふ。

一方、二代目の沖縄竹富郷友会長であつた大山保表先生は、次のように述べている。

竹富には愛郷心、肉親の情、島の人々の情など郷里のよさがあります。しかし一方では自分の幸福、子孫の繁栄の為には、できだけ島の外へ定着した方がいいということ、そういう必要性を痛切に感じて郷友会は自然とできたわけですよ。

それで最初のうちはね、お互い就職の世話をする、食料を世話する、寄宿先なども何名か預りながら世話をしました。私が（二代目）会長だった頃は西塘会（ニシトウカイ）という名前でした。一九五二年十二月、沖縄に来たその年に、こつちはこつちで郷友会を結成しようと考えました。竹富での生活を希望溢れるような気持にするためにもね。お互いが情報を集め合う、そして力になりあう、職場への力も利くようになる、こういったことで郷友会を結成して行つたわけです。やっぱり郷友会は心の拠り所ですよね。

それと、小さい時代の思い出や苦も楽も一緒にし、一生懸命我慢もしたし、終戦後はよりよい状態を作るために外へも出ていたし、それらの助け合いを強化するためにも必要だつたんですね。外へどんどん出でていっても不安感を取り去られるし、徐々に生活も安定し、わが身の発展などやつていこう、そしてそのためには「やすらぎの場」も必要だということで郷友会を結成することになつたわけです<sup>\*3</sup>。

琉球大学の教授であつた大山保表氏も、善三氏同様にインテリであったが、保表氏の考えは、竹富島で生活を共有した郷友会員

の相互扶助であり、やすらぎの場としての郷友会の在り方であつた。しかし、山城善三・大山保表をはじめ、会員のほとんどが、ゆえ沖縄の竹富郷友会が「西塘会」という名称になつたのである。その意味では、東京竹富郷友会と沖縄竹富郷友会の設立の趣旨の違いは時代の違いと、竹富島との距離の差によるものと思われる。

沖縄竹富郷友会は、以上のような経緯から、一九五〇年、山城善三氏を初代会長とし、「西塘会」として発足した。その三年前の一九四七年（昭和二二）に発足した石垣竹富郷友会の初代会長も山城善三氏だつたことを考え合わせてみると、石垣、沖縄の二つの郷友会の設立に善三氏が深くかかわっていたのである。善三氏は、八重山民政府の産業部長だつたが、八重山と宮古の民政府が沖縄民政府に統合され、琉球政府になつた後、沖縄本島に移り住んだ。

その後、一九七五年（昭和五〇）、西塘会は「沖縄竹富郷友会」と改称されたが、その活動の柱は、竹富島への資金援助であつた。目につく記録を次の表にまとめた。

（表）沖縄竹富郷友会の主な資金援助活

年	事項・金額
一九五三年（昭和二二八）	台風災害見舞金、五〇〇円を贈る
一九五四年（昭和二九）	竹富島成年文庫へ書籍購入費、二二一〇〇円米軍票B円を贈る
一九五五年（昭和三〇）	西塘例祭へ祭祀料、一〇〇〇円米軍票B円を贈る

であったが、保表氏の考えは、竹富島で生活を共有した郷友会員

B円を贈る

一九五九年（同三四） ミルク奉安殿新築献納金、二二七ドル奉納

一九六〇年（同三五） 種子取祭へ一〇ドル奉納

一九六六年（同四二） 竹富町全戦没者慰靈塔建立へ一四四九ドル七五セント寄付

一九六八年（同四三） 種子取祭用天幕一一張、飾幕一張、総額八二三ドル贈る

一九七一年（同四六） 竹富公民館建設資金第一回送金二三六二ドル

一九七三年（同四七） 竹富公民館建設資金第二回送金六九〇ドル

一九七三年（同四八） 種子取祭舞台用鉄柱を名嘉山助治、真栄里文雄、新本実の寄付金六万三九六〇円をもつて購入し、大一商事を経て贈る

三 石垣竹富郷友会  
石垣竹富郷友会の設立は、一九四七年（昭和二二）であった。石垣竹富郷友会設立の思いを考えると、石垣島は竹富島にもつとも近いので、東京の竹富郷友会のような望郷の念は薄かつたと思われる。石垣竹富郷友会設立については、筆者が瀬戸淳氏から書き書きした話を紹介する。

私が属する石垣の竹富郷友会は、昭和二十二年の七月八日に発足しました。その設立の準備委員会は、同じ年の六月に根本旅館で開かれました。私が妻の静と結婚して、石垣島に出てきて間もない頃のことでした。

その会の中心的な方が、小学校時代にお世話になつた根本精能先生だつたこともあり、私は転居して、なんとなく心細い思いをしていましたので、「竹富島出身者が」お互いに協力し合つて、他の島の人たちに負けないようにしよう」という根本先生のお言葉にたいへん勇気づけられました。

それからおよそ一ヶ月後、竹富郷友会の設立総会が開かれました。場所は、八重山民政府の土木農林部の会議室でした。会場をそこに設けたのは、その頃叔父の山城（当時、与那国）善三が、八重山民政府の産業部長をしていましたからです。設立総会の出席者は、三十数人ほどだつたと思います。設立総会では、会長に山城善三叔父、幹事長に根本精能さんが選出されました。

また書記会計は、私が引き受けました。当時、会活動の中心になられた方に、萬田繁雄さん、渡嘉敷信さん、花城真保さん、細原真仁さん、新盛武雄さん、大山英能さんなどもおられました。

上記以外にも竹富小中学校体育館施設整備費などへの数回の寄付、竹富島の靈柩車購入資金などの寄付を行つてゐる。  
竹富島への資金援助は、石垣、東京の郷友会も行つてきただが、沖縄竹富郷友会の資金援助は、金額、回数ともに群を抜いていたといえよう。また、沖縄竹富郷友会の行事としては、石垣竹富郷友会と同じく、年一回の親睦運動会と一月の総会がある。運動会ではアイノタ、インノタ、ナージが優勝を競い、総会では華やかな芸能が披露されている。

発足当時の活動は、主として竹富島のお手伝いをすることでした。たとえば、竹富校の児童・生徒が石垣島での野球大会に出場するのを応援したり、竹富婦人会の石垣島旅行の接待をしたりしました。

また、竹富島の敬老会に記念品を贈ることもしました。発足当時は、石垣島に竹富の人はわずかしかいませんでした。交通の便も悪い時代ですから、竹富島の人々に会うことは懐かしい気持ちになりました。今の時代とは大違います。

初めのころは、会費を徴収しないで寄付金だけで賄うことになっていました。しかし、暫くしてから一世帯に付き十二円の年会費を徴収するようになりました。二回目の総会は、一九四八年（昭和二十三）の一月四日に開かれましたが、それ以後現在に至るまで、郷友会の総会は一月上旬に定着しています。ござんまりと出発した郷友会ですが、次第に活動の範囲を広げてゆきました。なかでも大きな活動は、「共同墓地」の購入だと思います。共同墓地の購入は、一九五六年（昭和三十一）に行われました。

右の瀬戸淳氏の話は、設立当初の郷友会の理念や活動がよく伝わつてくるようと思える。特に、根本精能先生の、「（竹富島出身者が）お互に協力し合つて、他の島の人々に負けないようによう」という言葉には、石垣竹富郷友会の設立の思いがしっかりと伝わつてくる。その言葉には、望郷の念はなく、一旗揚げようと云ふ氣負いがうかがえる。

要するに、竹富島出身が手を取り合つて、一致団結すれば、石垣島をはじめとする他の島々の出身者には負けないと云う強い思ひが滲み出ている。その意味において、石垣竹富郷友会は八重山

における勝者になることを目指していたということになる。ところが、具体的な活動としては、竹富島の敬老会に記念品を贈つたり、竹富の婦人会や児童生徒が石垣に来島したときは、大いに援助したりしている。ちなみに、石垣竹富郷友会は、一九五六年（同三二）から一九六七年（同四二）までは、「石垣西塘会」と称していた。竹富島の英雄・西塘にあやかろうという意図からの命名である。

そのほか、ユニークな活動としては、一九五六年（昭和三一）には共同墓地を購入し、管理運営を行つてのことである。郷友会員は同じ敷地に続々とお墓を造るようになり、今では第一・第二の共同墓地に、会員の先祖たちは隣合わせで祀られている。そして郷友会員の葬祭は郷友会が一手に引き受けている。この活動を通じて、親戚同様の親密な郷友の連携を強固なものにしている。

また、種子取祭をはじめとする、豊年祭、十五夜、ナーツキヨイなど、種々の行事には、石垣竹富郷友会員が大勢駆けつけて竹富島の祭事行事を盛り上げている。なかでも種子取祭の奉納芸能は、石垣竹富郷友会なくしては成立しえないと云えるほど、多大な貢献をしてきた。また御嶽の改築や集会所の改装など、さまざまな人的、資金的協力も行つてきた。このような活動を見ると、石垣竹富郷友会は竹富島の「分村」であり、石垣島に新しい竹富島の共同体が誕生したという印象を強く受ける。

大雑把な見方をすれば、東京竹富郷友会は「望郷の念」を基に生まれ、沖縄竹富郷友会は「相互扶助」を第一としてスターとしたが、石垣竹富郷友会は「新しい竹富村」として誕生したといえよう。そして、その微妙な違いは、竹富島との距離によって生じたものと思われる。しかし、時代とともに交通が発達し、竹富島

いが滲み出ている。その意味において、石垣竹富郷友会は八重山

たものと思われる。しかし、時代とともに交通が発達し、竹富島

と東京や沖縄との距離も縮まり、郷友会の在り方も変化してきて  
いるように思える。

#### 四 種子取祭と郷友会

復帰四年後の一九七六年（昭和五一年）六月、東京の国立劇場で種子取祭の芸能公演が行われた。三日間に亘る四回の公演であった。国立劇場の主催公演とあって、まずは竹富島の芸能の調査から始まつた。東京からは郡司正勝先生・西角井正大先生、沖縄県文化課からは宜保栄次郎先生・當間一郎先生などが数回来島された。竹富公民館は種子取祭国立劇場公演実行委員会を組織し、高那石吉・与那国清介・松竹昇介・上勢頭昇・野原行雄・富本忠・勢頭敏晴・宮良透・島仲長正が委員となり、狩俣正三郎が委員長をつとめた。

国立劇場公演には、大きな課題が二つあつた。一つは演目の編成及び出演者の問題であり、二つ目は旅費の工面であつた。演目の編成及び出演者については、竹富島内における破座間村と仲筋村の問題だけでなく、石垣竹富郷友会とも深くかかわつていた。というのは、種子取祭の芸能は、破座間狂言部・破座間東踊り部・破座間西踊り部・仲筋狂言部・仲筋踊り部の五つの団体で奉納されるが、それらの五つの団体すべてに石垣竹富郷友会の会員が参加していたからである。そんなわけで、石垣竹富郷友会にどつても、国立劇場公演は最大の関心事となつた。

二つ目の旅費問題については、国立劇場側は当初出演者二十五人で予算を組んでいたが、竹富公民館は七十名の出演者を予定していたので、とても折り合える状態ではなかつた。その件について、当時沖縄県の文化課にいた當間一郎先生は、「交通宿泊費等

の旅費については、国立劇場と県が折半することになつていて。  
(中略) それで玉盛さんが六階に降りてきたり、また電話でやりとりして、話し合いをしたことを覚えている。しかし、県は予算の関係上、結局当初予定していた二十五人を三十人に増やすのが精一杯で、五名の旅費を増やしたと思う」\*4と述べている。

當間先生が述べる「玉盛さん」とは、竹富島出身の玉盛隆起さんことで、彼は当時沖縄県の会計検査委員長であつた。玉盛さんは県庁の八階で仕事をされていたので、六階の文化課に降りてきたのである。竹富のこととあつて、玉盛さんも大いに奮闘されたようである。

当時、公民館長であつた狩俣正三郎は団長として上京したが、その記録を私なりに整理すると、次のようになる。

#### 旅費及び出演料（三十二名分）

竹富町からの補助	一、六三六、四〇〇円
竹富公民館の負担	五〇〇、〇〇〇円
三郷友会・竹富からの寄付	三〇、〇〇〇円
祝儀等の雑収入	七六二、〇〇〇円
非出演者（応援団）からの旅費徴収	一五四、〇八〇円
	三八四、〇〇〇円

収入合計は、三、七三六、四八〇円である。正三郎によると、収支決算では五〇〇万円の黒字となり、その残額は、破座間と仲筋の芸能保存会で二五五万円ずつ折半したことであつた。また、正三郎によると、石垣・東京の郷友会はもちろんのこと、沖縄では県庁に影響力のある山城（与那国）善三先生が陣頭指揮を執ると同時に、沖縄竹富郷友会も寄付集めに奔走したとのことであつ

た。

これらを要するに、一九七六年（昭和五二）の国立劇場公演は、単に国立劇場からの出演依頼で種子取祭公演を行つたというだけのことではなかつたということがよくわかる。というのは、出演希望者が多く、予定していた予算を大きく上回つたために、竹富島・石垣島・沖縄本島・本土の竹富島出身者が総力を挙げて旅費を工面したのであり、その中心となつたのが、竹富公民館と石垣・沖縄・東京の三郷友会だつたのである。それゆえ、一九七六年の国立劇場公演は、竹富公民館が培つてきた自助努力と自治の精神が、結果として石垣・沖縄・東京の三郷友会にしつかりと広められ、竹富公民館を中心に三郷友会が提携して島の伝統文化を継承する足掛かりを築いたと言える。つまり、種子取祭の国立劇場公演によつて、現在の竹富公民館と三郷友会の共通の理念が確立されたのである。

また、国立劇場公演の感動は、東京竹富郷友会の種子取祭奉納団となつて結実し、一九七六年以降、種子取祭になると東京から多くの人が種子取祭に参加するようになつたばかりでなく、島外在住者の数え年四十九歳、六十一歳、七十三歳の年男・年女は必ず種子取祭に参加して同期会を開くという行事を定着させ、多くの郷友会員が島の伝統文化を体感することになつたのである。

ところで、東京の国立劇場公演を契機として、石垣竹富郷友会は種子取祭芸能の素晴らしいさを目撃したことによって、島の伝統文化が大きな誇りとなり、東京・石垣の郷友会は竹富公民館との交流が緊密なつた。しかし、沖縄竹富郷友会の場合は、国立劇場の舞台に出演したのでもなく、観客として舞台の感動を受けたわけでも

ない。公演資金の援助に奔走しただけの役割を担わされたのだった。そして、それが沖縄竹富郷友会は、島との交流意識が低いと見られた要因になつたのではないかと考えている。

私は、二〇〇一年（平成一二）から宜野湾市で生活するようになり、沖縄竹富郷友会に参加してきたが、沖縄竹富郷友会の皆さんに竹富島の伝統文化に対する関心は非常に高く、愛郷心も強いことを実感している。種子取祭への参加者も多く、年男・年女の同期会にも積極的に参加している。しかし、個人として参加しても、郷友会の組織として参加し、公民館の組織と交流するという点では沖縄竹富郷友会はやや遅れを取つてゐるようで、それが沖縄竹富郷友会が目立たない原因であろうと思われる。また、沖縄竹富郷友会は、これまで竹富公民館に対して資金や物質的援助を積極的に行つてきたが、その反面、組織としての人的交流にはそれほど積極的でなかつた。それが、沖縄竹富郷友会が停滞しているのではないかという印象をもたらしたと考へる。ただし、近年の沖縄竹富郷友会は大きく変化してきており、二〇〇四年（同一六）、二〇〇七年（同一九）の「竹富島歴史文化探訪ツアーワー」をはじめ、二〇〇七年の「首里城上り」、「てだこホール種子取祭芸能公演」と積極的に交流活動を展開するようになつてきた。したがつて、今後の沖縄竹富郷友会は、東京及び石垣の郷友会とは一味違つた独自の人的交流を展開しつづけるであろうと予測されるのである。

## 五 町並み保存と郷友会

復帰後の竹富島の針路として、大きな柱が二つある。一つは伝統文化の保存継承に尽力し、それを間接的な観光資源として活用

に出演したのでもなく、観客として舞台の感動を受けたわけでも

統文化の保存継承に尽力し、それを間接的な観光資源として活用

することであり、これは先述したように昭和五二年の種子取祭の国立劇場公演によって郷友会も巻き込んで成功していると言える。二つ目は、一九八七年（昭和六二）三月、文化庁文化財審議会が竹富島の集落を国的重要伝統的建造物群保存地区に選定するよう答申したことである。それによつて、竹富島の町並み保存事業が開始され、同年の六月には、竹富島において第十回全国町並みゼミが竹富島で開催された。

いわゆる「町並み保存」は、直接的に観光事業を活性化させるだけでなく、竹富島の家屋敷・土地など、個人の私有財産と密接に結びついている。したがつて、町並みを基本にして観光事業に積極的に活用しようとする島ひととつでは大きな利益を生み出すことができる。また郷友会会員でも、竹富島の個人所有の土地を使って観光事業を行えば大きな利益を生み出すことができる。

一方、町並みを守るために島が清潔でなければならない。習慣としての早朝の清掃や、春秋の行事となつていて大掃除、あるいは道路の補修、我が家修理や景観との調和など、島の人々は日常的に気を配らなければならない。

ところで、大勢の観光客が押し寄せて来ると、道路の破損はひどくなり、騒音、水牛観光による悪臭など、島での生活環境は悪化し、住み辛い島となる。いや、島外在住者の郷友会員にも、「あなたの屋敷が荒れているので清掃して欲しい」との要望が出されてくる。よつて、観光業を行わない島民や郷友会員にとつては、その家屋敷の管理保全が負担となるわけだが、その一方で観光業を行う者にとつては利益を生み出しが、「町並み保存」の一側面である。

それで、竹富公民館は、竹富島の観光業者から「公民館協力費」

を徴収し、種子取祭には観光業を行わないようなどのさまざまな工夫をしてきたが、それでも環境悪化は進行している。つまり、「町並み保存」によつて、利益を得る者とそうでない者が出できており、貧富の差が拡大しているという事実がある。そして、それを解決するための手立ては、「うつぐみ」という精神論であり、みんなで島の景観を守ろうとする方法であつたが、「うつぐみ」の精神論だけでは、島の景観は守れないという状況になつてきている。その最大の要因は、個人的な利益が絡んでくるからである。祭りや芸能などの伝統文化は利益を生み出すものではない。「うつぐみ」の精神論とヤル氣があれば守つてゆけるのだが、「町並み保存」は観光業による利益と直接結びついている。

よつて、今後の町並み保存には、「竹富島における富の再分配」という方式を積極的に導入する必要があると同時に、観光業の根本となる竹富島の家屋敷、土地などの不動産所有者の意識が重要なとなつてくる。これまで、「土地は売らない」の一点張りで、竹富島の景観を守つてきたが、今後はその方法に限界が来ていることを認識する必要がある。というのは、不動産所有者から見れば、「売れないと不動産、利益を生み出さない不動産」には魅力がないばかりか、「固定資産税は払わなければならない」ということになり、果たしてそのような土地を子や孫に相続し管理する意識が芽生えるだろうかという心配も出て来るからである。また、一方では、不動産の売買を活性化すると、利益は生み出しが、島の地価が高騰し、投資家の餌食になる。だけでなく、環境破壊問題が生じるだけでなく、島での生活がしづらくなるばかりである。

このように考えたとき、町並みを保存するためには、竹富公民

館が中心となつて「富の再分配」を考え、土地管理運用を真剣に議論する必要があると考える。しかも、そのことは「もろ刃の剣」のようなもので、竹富島の土地の管理運用を誤れば、竹富島の景観だけでなく、竹富島の伝統文化も「うつぐみ」もすべて破壊されると繋がる危険性がある。かと言つて、何もせず手をこまねいていると、竹富島は外資によつて破壊される危険性が間近に迫つている。

しかも、この土地問題は、竹富公民館だけでは如何ともし難い。竹富公民館と、石垣・沖縄・東京の三郷友会が手を携えて、竹富島憲章の土地は、「売らない」「汚さない」「乱さない」「壊さない」「生かす」の精神を踏まえ、竹富島の土地問題を考える必要があり、それが竹富公民館と、石垣・沖縄・東京の竹富三郷友会の緊急の課題であると考える。

## 六 まとめ

「竹富の人は異郷の地にあつて、二人いれば郷友会を作る」と言われるほど、組織人でもある。これまで、石垣・沖縄・東京の三郷友会を中心にしてきたが、実を言うと、郷友会の下部組織として、婦人部があり、アイノタ・インノタ・ナージの各集落の組織があり、無数の小さな親族組織・同期会・同好会などの組織が郷友会と連携を取りながら活動し、それぞれが文集や記念誌を発行している。そして、それらの活動の心の拠り所が「うつぐみ」であり、その「うつぐみ」を武器として、恐れず、恥ずかしがらず、進取の気性で積極的に行動するのが、テードウンヒトウ（竹富人）である。

石垣・沖縄・東京の三郷友会の設立の思いは若干異なるが、竹

富公民館を中心に、島の伝統文化を守るために「うつぐみの心」で活動してきた。したがつて、賢い竹富人は、島の伝統文化を守り、「うつぐみの心」を継承するには、竹富公民館と石垣・沖縄・東京の郷友会が連携した島の不動産の有効活用が、重要であると考える。

\*1 与那国真智「郷友会六十年の回顧」（編集委員会『東京竹富郷友会創立六〇周年記念誌』たけとみ一九八五年、東京竹富郷友会）四八、四九頁。

\*2 期成会記念誌部会編『沖縄竹富郷友会創立五十周年記念誌竹富』（二〇〇〇年、沖縄竹富郷友会）収録の年表「沖縄竹富郷友会五〇年のあゆみ」五三頁、一九五〇年（昭和二十五年）の項目。

\*3 沖縄国際大学社会学科石原ゼミ編集『竹富郷友会調査報告書・一九九〇年度『あし』十二号から一部修正して、前掲書（\*2）『沖縄竹富郷友会創立五十周年記念誌竹富』に転載したもの。

\*4 「當間一郎・玉城憲文対談 種子取祭の国立劇場公演とその頃の八重山舞踊」（翻字／狩俣志保）（『星砂の島』十号）二〇〇六年、全国竹富島文化協会

石垣・沖縄・東京の三郷友会の設立の思いは若干異なるが、竹

## 古見村結願祭

二〇一四年九月十四日、西表古見村の結願祭が請原御嶽で行われた。結願祭は一年間の諸願を解くための祭祀である。ちなみに、請原御嶽は「八重山島由来記」(一七〇五年)に「をか御嶽」とあり、すでに「由来不相知」(由来相知れず)と記されている。

午後、奉納芸能の出演者は「古見ぬ浦の里」(公民館)に集合。午後一時前、長者を先頭に列をなし、太鼓を打ち鳴らしながら中道を通って御嶽へ向かい、同御嶽の神庭を一巡する。そして、神庭で棒術(一番棒、二番棒、三番棒、五番棒)の奉納があつた後、御嶽内に特設された舞台で座開きの舞踊「かぎやで風」が演じられる。続いて長者・ノミーとその子孫が登場して舞台を一巡。その後、以下の芸能が次々と奉納された。

- ①舞踊「かぎやで風」、②舞踊「今帰仁」、③舞踊「耳よ耳」、④舞踊「テンヨー」、⑤舞踊「馬節」、⑥舞踊「マンガニスツツア」、⑦舞踊「シヨンカネー」、⑧舞踊「イシヤドーネ」、⑨舞踊「口説」(一番狂言、二番狂言)、⑩舞踊「バーチ」、⑪舞踊「恩納節」、⑫舞踊「ゆがふ口説」、⑬狂言「鍛冶工狂言」、⑭舞踊「ヤクジャーマ節」、⑮舞踊「鶴亀節」、⑯舞踊「古見の浦節」、⑰舞踊「はしゆば節」、⑱狂言「田耕し」、⑲舞踊「干瀬節」、⑳狂言「亀組」(①~⑯までは「長者」のなかの演目)。最後に神庭で獅子舞を演じ、奉納芸能を終えた。

古見公民館館長・新盛基代氏は、「本日は結願祭に欠かせない演目のみを一生懸命演じました。今後どのように継承していくのかが課題です。現在二七世帯という少ない人数ですが、ずっと続

けていきたい」と挨拶した。

「少ない人数」であつても、「長者の大主」を踏まえた基本的な芸態が維持されていることは、芸能伝承の母胎がしつかりしていることを物語っている。今後、それを骨格として出演人数に応じた伸縮自在の奉納芸能が展開できるものと思われる。



## 第十回 白浜芸能祭

白浜青年会（下地周平会長）が主催する「第十回白浜芸能祭」が、二〇一四年十二月二一日に海人の家で開かれた。恒例の行事を楽しみにしている人も多く、白浜集落をはじめ、近隣集落から大勢が駆けつけた。

今回は第十回という節目にあたり、主催者が記念品を準備し、観客を温かいステップでもてなしたことなども特筆できる。大城一文公民館長は「芸能祭が十回目を迎える、定着したことはたいへん素晴らしい。ハーリー前夜祭とこの芸能祭は白浜を活気づける二本柱」と満面の笑み。

座開きは青年会長夫婦による「赤馬節」。その後、会長は踊り衣装のままマイクを握り、多くの来場者にお礼を述べた。そこで青年会から公民館に照明器具を寄贈したことなどの報告もあった。そして、白浜小学校児童十七名による「子ども太鼓」は、『遊び庭』年中口説の曲にあわせ、元気なバチさばきを見せた。

続く舞踊「南洋浜千鳥」は、白浜に伝わり大切に踊られている演目である。八重山各地で同名の舞踊は数種あるけれども、浜千鳥に扮したコスチュームの二人が踊るのは白浜ならではのもの。とりわけ第四回芸能祭では、その由来を劇に仕立てたほど、白浜地域住民にとつては思い入れの深い演目である。

そして、粹な扇子の扱いが印象に残る舞踊「西表口説」。これに続く演題は「ぐみとり」とのこと。一見組踊のことかと思いきや、かつての「汲み取り」の様子をデフォルメして描写した喜劇（悲劇？）である。大真面目に組踊の様式や型を真似ながら、「汲み取り」を演じたところが、品性下劣な悪ふざけに陥らずに済んだポイントであろう。

後半幕開けは、舞踊「繁昌節」「久高節」「高那節」と軽快な演目がテンポよく続く。また、男性五人による勇壮な「白浜太鼓」は観衆の目を引き付けていた。

トリは地元人気バンド「白浜歌劇団」。三線の入った六人の大所帯だが、バランスよいアンサンブルで会場を盛り上げた。『安里屋ユンタ』はりくやまく『ヒヤミカチ節』とテンポアップするにしたがつて会場もヒートアップ。拍手喝采のなか幕を閉じた。

その他、前半と後半の幕間には、「西表戦隊ヤマピカリヤー」が現れ、お菓子を配つて子どもたちを喜ばせた。これも芸能祭恒例のクリスマスプレゼントなのだという。

青年は練習を重ねて何役もこなし、地域住民がその成長を温かく見守る、その雰囲気が芸能祭を成り立たせているようにも思う。最後に会員から「来年は『白浜口説』をつくりたい」との決意表明があつた。風光明媚な白浜の風景と、自由移民と鉱山開発の歴史を盛り込んだ、白浜ならではの口説を期待している。



取り」を演じたところが、品性下劣な悪ふざけに陥らずに済んだ。ボイントであろう。

史を盛り込んだ、白浜ならではの口説を期待している。



この本は、沖縄県立図書館蔵書のうち重複する沖縄関係資料（約12,000冊）の中から、例年必要な機関へ譲渡する「譲渡会」の通知でした。

## 沖縄県立図書館譲渡会について

平成27年1月7日付で沖縄県立図書館長より各関係機関宛に「図書館資料の譲渡について」（図書館第754号）の案内がありました。それは県立図書館蔵書のうち重複する沖縄関係資料（約12,000冊）の「有効活用を図るため、例年必要な機関へ譲渡」するという「譲渡会」の通知でした。

2月1日に県立図書館書庫にて八重山関係資料の調査を行ない、2日に以下の資料を譲り受けたことを報告します。

書名	著者	発行所	発行年
沖縄案内	島袋源一郎	島袋源一郎	1918
八重山島民謡誌	喜舎場永珣	郷土研究社	1924
南島情趣	本山桂川	聚英閣	1925
島國の唄と踊	田辺尚雄	磯部甲陽堂	1927
八重山古謡 第一輯	解説／宮良當壯、採譜／宮良長包	郷土研究社	1928
南島叢考	宮良當壯	一誠社	1934
日本の言葉	新村出	創元社	1940
南島覚書	須藤利一	東京書籍	1944
日本の隅々	宮良當壯	養徳社	1947
南島風土記	東恩納寛惇	沖縄郷土文化研究会	1950
南嶋入墨考	小原一夫	筑摩書房	1962
八重山ユンタ集—沖縄古謡—	浦原啓作	音楽之友社	1970
安里大親清信伝 全	与儀清栄	毛氏安里大親公徳顕彰会	1971
古代の沖縄〔第2版〕	宮城真治	新星図書	1972
波照間島民俗誌	宮良高弘	木耳社	1972
与那国島地下水調査報告書—地下水調査委託業務—	国建設計工務株式会社	国建設計工務株式会社	1972
新八重山歴史	牧野清	牧野清	1972
明治の沖縄—一八九六年六月発行「沖縄風俗図」復刻—		月刊沖縄社	1972
沖縄県庶民史—日本一の貧乏との戦い—	川平朝申	月刊沖縄社	1974
沖縄宮古ことわざ全集	吉村玄得	吉村玄得	1974
神・共同体・豊穣—沖縄民俗論—	村武精一	未来社	1975

この本は、沖縄県立図書館蔵書のうち重複する沖縄関係資料（約12,000冊）の中から、例年必要な機関へ譲渡する「譲渡会」の通知でした。

石垣小学校星霜94周年開校記念日・93 3 平方米体育館竣工功・体育館内部施設事業達成記念誌	石垣小学校体育館内 部施設充実期成会	石垣小学校	1975
沖縄の郷土月刊誌 青い海 №63—特集 八重山の英雄・オヤケアカハチー	津野創一	青い海出版社	1977
南島歌謡	小野重朗	NHKブックス	1977
沖縄の織物—南国の素朴な伝統美—	中江克己 企画編集	泰流社	1978
大濱信光詩集 先島航路	大濱信光	大濱京	1979
沖縄の秘境を探る	高良鉄夫	琉球新報社	1980
郷友会	琉球新報社編	琉球新報社	1980
沖縄関係雑誌展示目録	沖縄県立図書館編	沖縄県立図書館	1981
沖縄の道—道をみる・道のうつりかわ り・道をつくる—	ケー・シー・エス	沖縄開発庁沖縄総合事 務局	1982
ふるさとの歌心よ永遠に—宮良長包先 生顕彰記念誌—	編集委員	八重山青年会議所	1983
近代沖縄の教育	安里彦紀	三一書房	1983
比嘉春潮文庫郷土資料分類目録	沖縄県立図書館編	沖縄県立図書館	1987
天野鉄夫文庫展展示目録—読書週間行事	沖縄県立図書館編	沖縄県立図書館	1987
南島の地形—沖縄の風景を読む—	目崎茂和	沖縄出版	1988
新沖縄文学 76号—特集 水と暮らし—	屋富祖仲啓	沖縄タイムス	1988
沖縄の同人誌展示目録	沖縄県立図書館編	沖縄県立図書館	1989
二足の草鞋—中村喜代治の軌跡—	宮城信行	中村佳代	1990
八重山のお嶽	牧野清	あーまん企画	1990
沖縄県公共図書館（室）所蔵新聞・雑 誌総合目録	沖縄県立図書館・沖 縄県公共図書館連絡 協議会資料部会編	沖縄県立図書館	1992
試訳 久米島三鳥論	仲原裕 試訳	久米島新聞社	1992
ハワイ大学宝玲文庫複製資料目録	沖縄県立図書館編	沖縄県立図書館	1995
沖縄県立図書館所蔵一般雑誌の沖縄関 係記事索引集	沖縄県立図書館編	沖縄県立図書館	1996
沖縄県立図書館の歩み〔展示目録〕 戦 前篇—平成11年度読書週間行事展示会—	沖縄県立図書館編	沖縄県立図書館	1999
沖縄竹富郷友会創立50周年記念誌 竹 富	沖縄竹富郷友会創立 50周年記念期成会記 念誌部会編	沖縄竹富郷友会	2000

沖縄生物学会誌 第40号	沖縄生物学会編集委員	沖縄生物学会	2002
沖縄生物学会誌 第42号	沖縄生物学会編集委員	沖縄生物学会	2004
沖縄生物学会誌 第43号	沖縄生物学会編集委員	沖縄生物学会	2005
私の社会心論 歌を忘れたカナリアたちへ	後盛秀行	やまねこ出版	2005
在沖西表郷友会創立45周年記念誌	在沖西表郷友会創立45周年記念事業実行委員会編	在沖西表郷友会	2005
宮古の新聞百年史—宮古毎日新聞創刊50周年企画—	砂川玄徳	宮古毎日新聞社	2005
オヤケアカハチ・ホンカワラの乱と山陽姓一門の人々	大濱永亘	南山舎株式会社	2006
沖縄生物学会誌 第45号	沖縄生物学会編集委員	沖縄生物学会	2007
東松照明と沖縄 太陽へのラブレター	仲里効、タイラジュン、新里義和、大城仁美、謝花佐和子、仲里なぎさ	大和プレス	2011
冊封琉球使録集成完結記念シンポジウム 冊封使と琉球		久米国鼎会	2011
沖縄民俗研究 第31号	沖縄民俗研究編集委員会	沖縄民俗学会	2013
沖縄民俗研究 第32号	沖縄民俗研究編集委員会	沖縄民俗学会	2013

石垣小  
3平方  
設事業  
沖縄の  
集 八  
南島歌  
沖縄の  
大濱信  
沖縄の  
郷友会  
沖縄開  
沖縄の  
り・道  
ふるさ  
生顕彰  
近代沖  
比嘉春  
天野鉄  
南島の  
新沖縄  
沖縄の  
二足の  
八重山  
沖縄県  
誌総合  
試証  
ハワイ  
沖縄県  
係記事  
沖縄県  
前篇一  
沖縄竹  
富

## 平成26年度受贈図書一覧

多数の個人、関係機関等からの御寄贈、誠にありがとうございます。

受贈図書（発行年・編著者）	寄贈者芳名
アーカイブズ ARCHIVES 沖縄県公文書館だより 第47号（2014年、沖縄県文化振興会）	沖縄県文化振興会
アジア・太平洋の環境・開発・文化2（2001年、未来開拓大隊プロジェクト事務局編）	飯田泰彦
石垣市史叢書20 球陽 八重山関係記事集 下巻（2014年、石垣市教育委員会市史編集課編）	石垣市教育委員会市史編集課編
石干見に集うー伝統漁法を守る人びとー（2014年、田和正孝）	石垣繁
浦添市移民史 一証言・資料編一（2014年、浦添市立図書館編）	浦添教育委員会
大阪・沖縄・アジア（1999年、水内俊雄編）	飯田泰彦
沖縄研究資料29 琉球沖縄本島取調書（2014年、法政大学沖縄文化研究所）	法政大学沖縄文化研究所
沖縄県史 史料編24 自然環境新聞資料 自然環境2（2014、沖縄県教育庁文化財課史料編集班）	沖縄県教育庁文化財課
沖縄県平和祈念資料館だより No.14（2014年、沖縄県平和祈念資料館）	沖縄県平和祈念資料館
沖縄県平和祈念資料館年報 No.27（2014年、沖縄県平和祈念資料館）	沖縄県平和祈念資料館
沖縄県立芸術大学 in 久米島報告書（2014年沖縄県立芸術大学付属研究所）	沖縄県立芸術大学付属研究所
沖縄県立芸術大学 in 伊良部島報告書（2015年沖縄県立芸術大学付属研究所）	沖縄県立芸術大学付属研究所
沖縄史料編集紀要 第37号（2014、沖縄県教育庁文化財課史料編集班）	沖縄県公文書館
沖縄文化研究 40（2014年、法政大学沖縄文化研究所編）	法政大学沖縄文化研究所
恩納村誌 第1巻 自然編（2014年、恩納村誌編さん委員会）	恩納村役場
感想文集 ひめゆり 第25号（2014年、尾鍋拓美・仲田晃子編）	沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立ひめゆり平和祈念資料館（以下、ひめゆり平和祈念資料館）
久米島における東アジア諸文化の媒介事象に関する総合研究（1999年、京都大学人文科学研究所）	飯田泰彦
自然との語らい [2001年追加再版]（2001年、島袋憲一編）	島袋憲一
首里城公園管理センター調査研究・普及啓発事業年報 第4号（平成24年度号）（2014年 池田孝之編）	一般財団法人沖縄美ら島財団首里城公園管理部
焼酎・泡盛 用語集 weblio辞書（2013年、日本酒造組合中央会作成を、中村誠司編）	中村誠司
昭和の歴史 第3巻 天皇の軍隊 一帝国陸海軍の特質と全貌一（1988年、大江志乃夫）	通事孝作
知床博物館研究報告 第35集（2013年、内田暁友編）	斜里町立知床博物館

知床博物館研究報告 第36集 (2013年、内田暁友編)	斜里町立知床博物館
新大宜味村史「シマジマ・ビジュアル版」わーけーシマの宝物 (2014年、大宜味村役場)	大宜味村史編纂委員会シマジマ専門部会
精選八重山古典民謡集（一）[第3刷] (2013年、制作・編著者／當山善堂)	當山善堂
尖閣研究 尖閣諸島海域の漁業に関する調査報告—沖縄県の漁業関係者に対する聞き取り調査— 2012年 (2014年、尖閣諸島文献資料編纂会編)	尖閣諸島文献資料編纂会
尖閣研究 高良学術調査団資料集(上)(下) (2007年、尖閣諸島文献資料編纂会編)	尖閣諸島文献資料編纂会
爽風一過 —外間政彰追悼文集— (1997年、外間政彰追悼文集刊行委員会)	西里喜行
第十回 琉球・中国交渉史に関するシンポジウム論文集 (2014、沖縄県教育庁文化財課史料編集班)	沖縄県教育庁文化財課
中琉歴史關係档案 嘉慶朝（六）(2014年、中国第一歴史档案館)	沖縄県教育庁文化財課
中琉歴史關係档案 嘉慶朝（七）(2014年、中国第一歴史档案館)	沖縄県教育庁文化財課
中琉歴史關係档案 嘉慶朝（八）(2014年、中国第一歴史档案館)	沖縄県教育庁文化財課
東海大学学園史ニュース №9 (2014年、東海大学望星学塾学園史資料センター)	東海大学望星学塾学園史資料センター
東海大学七十五年史編纂だより (2014年、橋本敏明編)	東海大学望星学塾学園史資料センター
唐何処思考—こう考えると面白い島言葉と時代— (2013年、上間無々)	上間無々
那覇市の史跡・旧跡ガイドブック (2014年、那覇市歴史博物館編)	那覇市
南城市文化財ガイドマップ	南城市教育委員会
虹とみやこ 一二コライ・A・ネフスキ一生誕120年記念シンポジウム 報告書— (2012年、ネフスキ一生誕120年記念シンポジウム実行委員会)	ネフスキ一生誕120年記念シンポジウム実行委員会
日本近世生活絵引 奄美・沖縄編 (2014年、神奈川大学非文字資料研究センター)	神奈川大学非文字資料研究センター
日本の軍隊—兵士たちの近代史— (2002年、吉田裕)	通事孝作
鳩間島振興開発の課題 (1979年、鳩間島研究サークル)	大工義紀
ひめゆり平和祈念資料館資料館だより 第53号 (2014年、ひめゆり平和祈念資料館)	ひめゆり平和祈念資料館
ひめゆり平和祈念資料館資料館だより 第54号 (2014年、ひめゆり平和祈念資料館)	ひめゆり平和祈念資料館
ひめゆり平和祈念資料館年報 第25号 (2014年、ひめゆり平和祈念資料館)	ひめゆり平和祈念資料館
文化庁委託事業報告書 危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究—八丈方言、国頭方言、沖縄方言、八重山方言— (2014年、琉球大学国際沖縄研究所)	琉球大学国際沖縄研究所
法政大学沖縄文化研究所所報 第74号 (2014年、法政大学沖縄文化研究所)	法政大学沖縄文化研究所
法政大学沖縄文化研究所所報 第75号 (2014年、法政大学沖縄文化研究所)	法政大学沖縄文化研究所

宮古郷土史研究会会報 151号～200号 (2014年、宮古郷土史研究会)	宮古郷土史研究会
宮良村の民俗と文化 一大濱咲文化振興基金助成事業報告書—(2014年、小浜勝義)	小浜勝義
ムンディ mundi No.11 (2014年、国際協力機構)	国際協力機構
八重山古典民謡と祭事〈自由研究〉(2014年、山田倫子)	山田倫子
八重山博物館企画展(海と船の企画展) 海に沈んだ歴史 一タイムカプセルを探してみよう— (2013年、石垣市立八重山博物館)	石垣市立八重山博物館
靖国の戦後史 (2002年〈第4刷〉、田中伸尚)	通事孝作
与那原町史だより第5号(2013年、与那原町教育委員会生涯学習振興課町史編纂室)	与那原町教育委員会
立正大学大学院紀要 第30号 (2014年、立正大学大学院文学研究科)	島村幸一
立正大学文学部研究紀要 第30号 (2014年、齊藤昇編)	島村幸一
琉球王国の美 一織染— (2014年、首里城公園管理部編集事務局)	首里城公園管理部
琉球楽器楽曲調査業務報告書 清代福州の音楽状況—琉球への影響— (2014年、一般財団法人沖縄美ら島財団)	一般財団法人沖縄美ら島財団
琉球大学附属図書館報 びぶりお 161 (2014年、琉球大学附属図書館)	琉球大学附属図書館
琉球の言語 38 (2014年、法政大学沖縄文化研究所)	法政大学沖縄文化研究所
歴代寶案 校訂本第10冊 (2014、金城正篤)	沖縄県教育庁文化財課
歴代寶案編集参考資料13 清代福建省地方官年表(新訂・増補版) (2014、金城正篤)	沖縄県教育庁文化財課
具志頭村立歴史民俗資料館 年報3 (2005年、具志頭村立歴史民俗資料館)	具志頭村立歴史民俗資料館
琉球大学附属図書館報 びぶりお 162 (2015年、琉球大学附属図書館)	琉球大学附属図書館
沖縄県公文書館研究紀要 第17号 (2015年、沖縄県文化振興会)	沖縄県文化振興会

# 竹富町史の刊行物

## 1. 『竹富町史』別巻2 竹富町関係文献目録 1990年度（平成2） 関係機関へ配付

竹富町関係の文献資料の標題、内容、所蔵機関等を島ごとにまとめた調査研究のための手引き書。日本十進分類法(NDC)に準じて、一般、哲学・宗教、歴史、社会科学(社会科学一般、行政、教育)、自然科学(自然科学一般、地理・地質、海洋・気象、植物、動物一般、鳥類、医学・衛生)、工学・工業、産業(産業一般、開発・土地問題)、芸術、言語、文学に分類して文献の発行日順に編集、末尾には所蔵機関を明記してある。B5版 ソフトカバー簡易製本117頁。

## 2. 『竹富町史』別巻3 写真集 ぱいぬしまじま 1992年（平成4） 本体2,500円+税

明治時代中後期から現代に至るまでの島々の実相を、島ごとに村落・自然、産業・交通、教育・文化・スポーツ、暮らし・戦争・祭祀・芸能の各項目に分類して写真で表現した資料集。924枚の写真を用い、島ごとに、一言で島を知る題名を標題に付け、島の“顔”を示す。モノクロ写真を主体に編集しているが、巻頭にはカラー写真を用い、竹富町の“今”をアピールしている。写真から古き良き時代の島々を偲ぶことができる。A4版 糸かがり上製本 319頁。

## 3. 『竹富町史』第十一巻資料編 新聞集成 I 1993年度（平成5） 本体2,000円+税

1898年（明治31）から1918年（大正7）の間、沖縄本島で発行された新聞記事を集めた資料集。収録した新聞は、県内で最初に発行された、「琉球新報」（明治26年創刊）、「沖縄毎日新聞」（明治41年創刊）の二紙。「明治・大正期の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、文化等の記事を古い順に配列して編集した。県紙であるため、八重山関係の記事は少ないが、それでも西表炭坑や八重山の地誌等の記事は特徴に値する。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 684頁。

## 4. 『竹富町史』第十一巻資料編 新聞集成 II 1994年度（平成6） 本体2,000円+税

1917年（大正6）7月から1933年（昭和8）12月までの間、八重山で発行された新聞記事を集めた資料集。取り扱った新聞は「先島新聞」（大正6年7月～同15年8月）、「八重山新報」（大正10年2月～昭和8年12月）、「先島朝日新聞」（昭和3年5月～同8年12月）、「八重山民報」（昭和7年1月～同8年12月）の三紙。「大正・昭和戦前期の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、教育、文化等の記事を年代の古い順に配列して編集した。資料集に盛り込まれた記事は村勢、マラリア問題、村の行財政、選挙等が注目され、往時の竹富村を浮き彫りにしている。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 724頁。

## 5. 『竹富町史』第十二巻資料編 戦争体験記録 1995年度（平成7） 本体3,000円+税

アジア太平洋戦争中の町内の世帯別戦災実態調査、全戦没者数、戦争体験記及び沖縄戦、八重山の戦争をまとめた資料集。各島、各集落ごとに詳細な戦災調査を行い、町内における戦争の実態を明らかにしている。特筆すべきは戦時中の集落地図を作製するとともに、さらに集落ごとに各家族単位の戦争被害を具に図表にしてあること。この資料集から戦争マラリア等の惨事を浮かび上がらせ、戦争がいかに悲惨だったかが分かる。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 1190頁。

## 6. 『竹富町史』第十一巻資料編 新聞集成 III 1996年度（平成8） 本体2,000円+税

1934年（昭和9）2月から1945年（同20）3月までの間、八重山と沖縄本島で発行された新聞記事を集めた資料集。取り扱った新聞は「八重山新報」（昭和9年2月）、「先島朝日新聞」（昭和9月1月～同15年8月）、「八重山民報」（昭和9年1月～同11年6月）、「海南時報」（昭和10年8月～同20年3月）、「沖縄日報」（昭和11年11月～同15年10月）、「琉球新報」（昭和13年2月～同15年11月）六紙。「昭和戦前期の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、教育、文化等の記事を年代の古い順に配列して編集した。資料に盛り込まれた記事は多岐にわたるが、当時の世相を反映し、戦時色の濃い記事が目立つ。それでも記者の島を訪ねてのルポルタージュ記事は、往時の島の一面を垣間見せる。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 720頁。

## 7. 『竹富町制施行50周年記念誌』ぱいぬしまじま50 1998年度（平成10） 本体2,500円+税

1948年（昭和23）の町制施行から1998年（平成10）までの竹富町の50年の足跡を写真、年表等で集成した記念誌。本誌は、島びとの暮らしや学校の様子、祭りなどがモノクロ写真を使用して編集され、その年の人口も掲載し、資料的な価値を持たせるように工夫してある。歴史年表は行政に限らず、婦人会、青年会等の動向も扱い可能な限り詳細に、年別の事項を入れてある。また、姉妹町である北海道の斜里町との親善交流の歩みも盛り込まれている。歴代町長、歴代議會議長、町議會議員、各課課長の顔写真、職員の集合写真、竹富町振興目録も掲載してある。A4版 糸かがり上製本 247頁。

## 8. 『竹富町史』資料集① 鉄田義司日記 1999年（平成11） 本体1,500円+税

和歌山県久度山町出身の陸軍少尉（後に中尉・大尉）鉄田義司が残した戦時に書き残した個

人的な陣中日記。彼は1941年（昭和16）、内離島に司令部を置く船浮要塞に赴任したが、その後所属する大隊が石垣島に移転したため、石垣島に移った。日記には赴任の時から要塞での軍事訓練や、石垣島に移駐後に米軍機から初空襲を受けた時の様子、さらに1945年（昭和20）、敗戦後の復員までに至る経過を記す。八重山の戦争を知る同時代資料として価値を有する。A5版 ソフトカバー簡易製本 519頁。

**9.『竹富町史』第十一巻資料編 新聞集成IV 2000年度（平成12） 本体2,000円十税**

1947年（昭和22）1月から1955年（同30）12月までの間、八重山で発行された新聞記事を集めた資料集。取り扱った新聞は、「海南時報」（昭和22年1月～同30年12月）、「八重山タイムス」（昭和22年1月～同30年12月）、「南西新報」（昭和22年9月～同28年10月）、「自由民報」（昭和23年7月～同29年1月）、「南琉日日新聞」（後に「八重山毎日新聞」と改題、昭和25年3月～同30年12月）、「八重山新報」（昭和30年4月～同10月）の六紙。「昭和戦後期①の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、教育、文化等の記事を年代の古い順に配列して編集した。資料集に盛り込まれた記事は、終戦直後の島々の様子を綴っているが、当時の新聞が一種の「政論新聞」だったこともあり、選挙に関する記事には政治色が濃厚に出ていている。それでも紙面から島びとの暮らしを窺い知ることができる。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 842頁。

**10.『竹富町史』第十巻資料編 近代2 2001年度（平成13） 本体2,500円十税**

南嶋民俗資料館（石垣市字大川）が所蔵する崎原文書「必要書」、琉球大学附属図書館（西原町千原）が所蔵する宮良殿内文書「必要書類集」を集成した近代文書の資料集編。「必要書」は、崎原當貴が残した文書。當貴は1897年（明治30）に崎山村頭に任せられている。この文書は一種の備忘録で、日記の形式をとる。中でも「人々ヨリ到来物控」は、贈答品のやりとりがあり、往時の村びとの暮らししづりが膾気ながら分かる。「必要書類集」は宮良殿内の直系である宮良當整が残した文書である。標題に「明治二十五年以降」とあるが、1896年（明治29）から1907年（同40）までの間の行政文書となっている。當整は白保村頭、新城村頭、竹富村頭を務めたが、行政文書は八重山島庁との往復文書、農業統計資料が中心である。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 348頁。

**11.『竹富町史』第十一巻資料編 新聞集成V 2002年度（平成14） 本体2,000円十税**

1956年（昭和31）1月から1960年（同35）12月までの間、八重山で発行された新聞の記事を集めた資料集。取り扱った新聞は「海南時報」（昭和31年1月～同34年4月）、「八重山タイムス」（昭和31年1月～同35年12月）、「八重山毎日新聞」（昭和31年1月～同35年12月）、「八重山新報」（昭和31年1月～同33年3月）の四紙。「昭和戦後期②の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、教育、文化等の記事を年代の古い順に配列して編集した。資料集に盛り込まれた記事は、多岐にわたるが、西表島開発問題をめぐる様々な調査、早稲田大学八重山学術調査団に関する記事等は歴史の一齣として特筆される。なかでも、町長選挙等を巡る記事は、当時の政治の季節を反映し、激しい紙面づくりを展開している。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 843頁。

**12.『竹富町史』第十一巻資料編 新聞集成VI 2003年度（平成15） 本体2,000円十税**

1961年（昭和36）1月から1964年（同39）7月での間、八重山で発行された新聞の記事を集めた資料集。取り扱った新聞は「八重山タイムス」（昭和36年1月～同39年7月）、「八重山毎日新聞」（昭和36年1月～同39年7月）、「八重山朝日新聞」（昭和37年1月～同39年7月）の三紙。「昭和戦後期③の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、教育、文化等の記事を年代の古い順に配列して編集した。収録された記事は、各新聞社によって特色があるが、総じて西表開発問題、町有地処分問題と新庁舎建設、八重山市町村合併と町役場移転問題、西表島での米軍事演習、大干ばつ、西表島での中学校統合問題、一年に二度の町長選挙等の記事がクローズアップされる。記事の中には現在に結びつくものもある。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 947頁。

**13.『竹富町史』第十巻資料編 近代1 2004年度（平成16） 本体2,500円十税**

竹富島喜宝院蒐集館が所蔵する明治30年代の文書を「近代1」として集成した近代文書の資料編。収録した史料は「村日記－明治37年以降」、「間切島会ニ関スル書類－自明治31年 至全37年・自明治37年 至」、「報告綴－明治37年」、「人頭税領収証綴－自明治31年 至明治35年」、「契約及金銭物品ニ関スル諸証書－自明治31年 至全36年」の五点。喜宝院蒐集館にはこのほか、数多くの民俗資料等があるが、これら的一部分は写真に収め、口絵として扱った。史料から人頭税施行末期及び廃止直後の島の様子を知ることができる。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 546頁。

**14.『竹富町史』第十巻資料編 近代3 2005年度（平成17） 本体2,500円十税**

琉球大学附属図書館が所蔵する宮良殿内文書のひとつ。明治30年代初中期の宮良當整日記を「新城村頭の日誌」の副題を付け、「近代3」として集成した近代文書の資料編。宮良當整は1897年（明治30）から1903年（同36）まで新城村頭を勤めた。収録資料は新城村頭時代に書き残した「明治三十三年 日誌 宮良記」「自明治三十四年丑年正月 至全十二月 日誌 宮良當整」と表題

9. 『竹

1947  
した資  
和22年  
同29年  
重山新  
済、教  
戦直後  
に関する  
できる。

10. 『竹

南嶋原  
原)が所  
貴が残  
録で、日  
暮らし。  
である。  
文書と  
復文書、

11. 『竹

1956年  
成した資  
和31年1  
年1月～  
等の記事  
西表島開  
として特  
面づく

12. 『竹

1961年  
た資料集  
和36年1  
の新聞集  
収録され  
庁舎建設  
中学校組  
結びつく

13. 『竹

竹富島  
編。収録  
・自明治  
及金銭物  
ぐの民俗  
末期及び

14. 『竹

琉球大  
城村頭の  
(明治3  
治十三

ものにしておきたい

15. 『竹富町史』第十巻資料編 近代4 2006年度(平成18) 本体2,500円+税

沖縄県地域史協議会がマイクロフィルムより複製した明治・大正・昭和戦前期の沖縄県に関する『官報』の記事の中から、八重山関係の記事を検索して収録した資料編。副題に「官報にみる八重山」を付した。『官報』は1883年(明治16)7月2日に創刊され、以後、日刊紙として発行されている。記事は、国会・内閣・裁判所等で決定した事項を国民に知らせる広報紙および民間に閲覧する広告紙としての性格を有しているとはいえ、行政上の歴史的事実を知るうえで充分な資料的価値がある。記事の中には、人頭税の廃止を裏付ける法律の施行、鉱業権に基づき申請する石炭等の鉱物の試掘・採掘願いの記事もある。「新聞集成」と合わせて利用すると、近代八重山の一側面が浮かび上がってくる。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 659頁。

16. 『竹富町史』第十巻資料編 近代5 2008・2009年度(平成20・21) 本体2,500円+税

波照間公民館が原本(所在不明)を所蔵していたと思われ、財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室が複製本を所蔵する「島兆通立つ通津 時明治三十五年一月 いたる三十七年十二月 波照間村事務所」、「波照間島ハンド転び記」(明治二十八年～二十九年)、それに波照間小学校が保管する「波照間小学校沿革誌(第壱部)」の三資料を、「波照間島近代資料集」の副題を付け「近代5」として集成した近代文書の資料編。「島序通達綴」が送付された時代は人頭税が幕を閉じ、日露戦争が勃発して日本が帝国主義を歩み始める時期にあたる。資料には日露戦争にかかる通達等もある。また、標題がないため仮に付したであろう「波照間島番所日記」は1895年(明治28)～1896年(同29)までの村番所の動向を日記スタイルで書き止めたもので、島の人物が数多く登場し、祭祀も載っており貴重なものである。「波照間小学校沿革誌」は、1894年(明治27)～1948年(昭和23)までの学校の沿革を「第壱部」としてまとめられている。学校の生徒数、人事異動、記念日などが記され、太平洋戦争になると強制疎開のことなどが記されている。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 434頁。

17. 『竹富町史』第二巻 竹富島 2011年度(平成23) 本体3,000円+税

『竹富町史』の第一弾を飾る島々編の史誌である。第二巻「竹富島」には、序章「うつぐみの島」、第1章「集落と自然」、第2章「歴史と伝承」、第3章「教育」、第4章「人と暮らし」、第5章「信仰と祭祀」、第6章「人の一生」、第7章「言語伝承」、第8章「竹富島の芸能」、第9章「人物」、第10章「歴史年表」、終章「竹富島の過去・現在・未来」が盛り込まれている。卷頭には島の伝統芸能である、種子取祭などの写真が掲載され、視覚に訴える編集方法が取られている。同史誌は自然、歴史、文化、民俗、暮らし、言語、人物などを、できるだけ網羅するように配慮した。B5版 糸かがり上製本 700頁。

18. 『竹富町史』第三巻 小浜島 2011年度(平成23) 本体3,000円+税

『竹富町史』島々編の史誌である。第三巻「小浜島」には、序章「かふぬ島 小浜」、第1章「島の概況」、第2章「自然」、第3章「歴史と伝承」、第4章「教育」、第5章「人と暮らし」、第6章「信仰と祭祀」、第7章「人の一生」など14章が盛り込まれている。そして、終章「ちゅらさんの島 小浜」で締めくくる。同史誌は自然、歴史、文化、民俗、暮らし、言語、人物などを、できるだけ網羅するように配慮している。B5版 糸かがり上製本 678頁。

19. 『竹富町史』第五巻 新城島 2013年度(平成26) 本体3,000円+税

『竹富町史』島々編の史誌である。第五巻「新城島」には、序章「バナリ焼の里とザンの島」、第1章「島の概況」、第2章「自然」、第3章「歴史と伝承」、第4章「バナリ焼とザン」、第5章「教育」、第6章「人と暮らし」、第7章「信仰と祭祀」、第8章「人生儀礼」、第9章「民間伝承」など全16章で構成されている。同史誌は自然、歴史、文化、民俗、暮らし、言語、人物などを、できるだけ網羅するように配慮している。B5版 糸かがり上製本 710頁。

20. 『竹富町史』第六巻 城間島 2014年度(平成26) 本体3,000円+税

『竹富町史』島々編の史誌である。第六巻「城間島」は、序章「神の島 夢の通い路 城間島」、第1章「島の概況」、第2章「自然」、第3章「歴史と伝承」、第4章「教育」、第5章「人と暮らし」、第6章「祭祀と歌謡」、第7章「人生儀礼」、第8章「民間伝承」、第9章「生業・産業」、第10章「交通・交易・通信」など全17章で構成されている。同史誌は自然、歴史、文化、民俗、暮らし、言語、人物などを、できるだけ網羅するように配慮している。B5版 糸かがり上製本 710頁。

※竹富町史の刊行物は、販売委託契約店にて店頭およびインターネット通信販売を行っております。詳細について竹富町教育委員会総務町史編集係(電話0980-88-7220)までお問い合わせください。

# 業務日誌

## 二〇一四年度

◆ 二〇一四年 (平成二六年)

四月 一日 年度始め式

竹富町史編集係主事一人を新規採用

山田書店、村中書店、BOOKSじのん、榕樹書林、NPOたきどうん、沖縄教販、南山舎、喜宝院蒐集館と委託販売契約を締結する。

四月 四日 美崎運輸倉庫を整理

沖縄タイムスに波照間永吉氏の新城島編の書評が掲載される

四月十五日 石垣在新城郷友会と「新城島」十五冊の売買契約を締結する。

市町村新採用職員研修に職員一人が出席（二五日）

四月二一日 職員一人干立村世願見学

四月二二日 今田求仁王氏が読谷町史、移民資料収集のため来

室 大城 肇氏より原稿「産業」受理

四月三〇日 本田昭正氏より原稿を受理

五月 一日 當山善堂氏来室 著書の寄贈あり

五月 二日 『女性自身』編集部記者・鈴木利宗氏来室

五月 八日 『沖縄県地域史協議会会誌』三七号に原稿提出

竹富町社会福祉協議会が監査のため町史編集室を使用する。美崎運輸倉庫整理

五月十一日 石垣久雄委員長・西原啓栄教育委員会総務課課長とミーティング

五月十三日 八島印刷より『竹富町史だより』納品。

五月十六日 竹富町新規採用職員研修（於・石垣港離島ターミナル会議室）職員一人が出席

五月二一日 南嶋民俗資料館と「竹富町刊行物販売委託契約」を締結する。

五月二三日 竹富町社会福祉協議会が監査のため町史編集室を使用する。

単独自治一〇〇年（八重山分村）三市町委員会に職員一人が出席

六月 一日 小浜島細崎ハーリー 職員一人が出席

六月 三日 石垣在新城郷友会と「新城島」十冊の売買契約を締結する。

六月 四日 新規採用職員接遇研修（於・石垣市健康福祉センター）職員一人が出席

六月 六日 新規採用職員接遇研修（於・南城市）。「第五卷『新城島』の発刊報告」

六月 八日 竹富町球技大会（於・大原小学校）職員一人が出張

六月十二日 石垣久雄・西原啓栄・飯田泰彦・通事孝作「竹富町史編集事業引継ぎ会議」（於・町史編集室）南山舎に版下制作費支払い

六月三十日 竹富町商工会と「竹富町刊行物販売委託契約」を締結する。

田村真知子氏より波照間島写真寄贈

七月 二日 竹富町制六六周年式典を開催

十二月 三日 八重山広域圏事務組合 人材育成「黒潮塾」平井

雅氏による講演「図解的思考力を身につけよ

五月 九日 竹富町社会福祉協議会が監査のため町史編集室を

使用する。美崎運輸倉庫整理

田村真知子氏より波照間島写真寄贈

竹富町商工会と「竹富町刊行物販売委託契約」を締結する。

- 七月 二日 竹富町制六周年式典を開催
- 七月 七日 台風八号接近中のため台風対策
- 七月 九日 石垣市民会館に於いて単独自治一〇〇年・八重山圈域三市町の歩みパネル展を開催
- 七月十五日 石垣在新城郷友会と「新城島」十冊の売買契約を締結する。
- 八月十八日 西表島編専門部会 職員一人が出張(於・那覇)
- 八月十九日 鳩間島執筆者連絡会(於・沖縄県立芸術大学)
- 九月十四日 上原連合公民館の敬老会へ写真パネル五十枚貸出し(於・中野わいわいホール)
- 九月十九日 大城 學氏に鳩間島の板証文五枚貸出し
- 十月三十日 阿佐伊孫良氏没 告別式二日(於・ゆいホール)
- 沖縄県地域史協議会 講演・報告「八重山の年中行事を考える」「石垣 繁」(於・石垣市立図書館)
- 十月三一日 沖縄県地域史協議会 巡見・報告「石垣島北部の歴史を考える」「松村順一」(於・伊原間公民館)
- 十一月 一日 沖縄県地域史協議会 巡見「石垣島・原風景の里を歩く」「松村順一・石垣 繁」(於・安良村跡)
- 十一月十六日 第十二回鳩間島編専門部会を開催 大城 肇・加治工真市・島袋憲一・吉川安一・吉川英治・アドバイザーとして屋嘉武雄が出席(於・町史編集室)
- 十一月二二日 町史編集委員 黒島精耕氏八重山毎日文化賞正賞を受賞
- 十一月二八日 伝統的建造物群保存地区九州ブロック地区大会(於・竹富島)職員一人が出張(→二九日)

- 十一月三日 八重山広域圏事務組合 人材育成「黒潮塾」平井雅氏による講演「図解的思考力を身につけよう」(於・与那国町)へ職員一人が出席(→四日)
- 十二月 五日 単独自治一〇〇年(八重山分村)パネル展(於・与那国町) 職員一人が出張
- 十二月二十日 竹富町民俗芸能発表会(於・西表島) 職員一人が出張(→二一日)
- 十二月二十四日 編集委員各位に、第三章第六節の追加原稿「ブシンヤーをめぐる諸説」を依頼。
- 十二月二六日 仕事納め式
- ◆ 二〇一五年 (平成二七年)
- 一月 五日 仕事始め式
- 二月 二日 沖縄県立図書館譲渡会へ職員一人が出張
- 二月 七日 第二二回やまねこマラソン大会へ職員三人が出張(於・西表島)
- 二月 十日 『竹富町史 第六巻 鳩間島』の印刷製本の入札(於・竹富町役場2階委員会室)
- 二月二七日 光文堂コミュニケーションズ株と『竹富町史 第六巻 鳩間島』印刷製本請負契約
- 二月二七日 「波照間島」編原稿締め切り
- 三月十三日 第三二回竹富町史編集委員会を開催(於・石垣港離島ターミナル会議室)
- 三月二七日 「黒島」編原稿締め切り
- 三月三一日 『竹富町史 第六巻 鳩間島』発刊。

## 編集後記

■『竹富町史だより』第三六号を発刊することができました。今号は、鳩間島編の発刊報告と、波照間永吉氏の新城島編書評、狩俣恵一氏の寄稿「竹富島と東京・沖縄・石垣の郷友会」。報告に「沖縄県地域史協議会」「沖縄県立図書館譲渡会」について、連載「記念碑を訪ねて」「その他「古見村結願祭」「白浜芸能祭」などを盛り込みました。

■竹富町史の本編ともいいくべき、「島じま編」も「鳩間島」で四冊目を数え、半分を越えました。町史編集係では残る「波照間島」「西表島」「黒島」の発刊に向けて編集作業に日々勤しんでいる所です。

■『竹富町史だより』のバックナンバーが竹富町役場のホームページ「広報たけとみちょう」から閲覧できるようになりました。現在は創刊号から第四号までの閲覧が可能です。

今後は竹富町内だけでなく全国、全世界から注目される町史だよりになりそうです。



平成27年3月31日発行

# 竹富町史だより

第36号

編集発行 竹富町教育委員会

沖縄県石垣市美崎町11番地1

☎ 0980-82-6191